



3月祭事暦

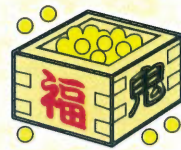
1・15日 **月次祭**
 午前10時～
 高宮祭
 第二宮・第三宮祭
 宗像護国神社祭(1日)
 午前11時～
 総社祭
 浦安舞奉奏(1日)
 豊栄舞奉奏(15日)

4日 **氏貞公墓前祭**
 午前11時～
 於=氏貞公墓前
 (宗像市上八)
 本年は神式で斎行

19日 **松尾神社祭**
 午前11時～
 於=境内松尾神社

20日 **皇霊殿遷拜式**
 午前10時～

た大節分祭



一月二十九日と二月三日、宗像観光協会(吉武邦彦会長)との共催による「むなかつた大節分祭」が行われ、「福」を授かろうとする参拝者約四千人が両日で参集し、寒さを感じさせない熱気で賑わった。

一月二十九日

前日二十八日に氏子青年会、宗像観光協会の奉仕により本殿横に特設舞台が設けられ、参拝者の受入れ態勢が整えられた。

一月二十九日午前十一時、豆打式は寒空ではあるが好天に恵まれ一時間前には今か今かと待ち構える参拝者が押し寄せた。定刻、昇殿参拝後、神職と共に観光協会メンバー会員の中から選ばれた方々が特設舞台上がり、先ず子供達への豆打式が行われ黄色い歓声が神苑にこだました。引き続き一般参拝者の豆打式が入場制限を行いながら三回に亘り行われた。一旦豆打式が始まると寒さを感じさせない熱気でさらに賑わいをみせた。

斎館前では同協会による出店ブースが設けられ、「ぜんだい」で冷えた体を温めようとコーナーには長蛇の列が出来、節分の神人和楽の賑わいをみせていた。

余滴

未曾有の大震災からもうまもなく一年が経とうとしている。この一年で多くの日本人が気付かされたことがあった。「がんばろう」という絆である。今回の大震災を契機に日本人としての一体感が急速に深まったように思われる▼近年、人と人とのつながりが希薄になり、無縁社会という言葉も生まれた。しかし、東北の被災者の方々の様子を報道で知り、我々が最も痛感したことは、家族や地域の絆の強さであり、その大切さではないだろうか。また、常に前向きに物事を捉え、毎日がんばっている被災者の方々の言葉から、我々が逆に励まされ、勇気をいただいたという現象も生まれた▼これから十年、二十年後に「平成二十三年三月十一日」を振り返った時、日本はその時を境に目覚め、変わっていった、大震災を新たな飛躍への大きな力にしたと自信を持って答えることができるだろうか。そうした未来への道筋を描き、家族や友人、地域や社会が手と手を取り合い、この国のあるべき姿「心」を結束し、様々な困難に立ち向かう力に変えていかなければならない。そして、このことを次世代を担っていく子供たちに、正しく語り継ぐことも我々に与えられた重要な役割と考える。(神)

遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

神具・装束・授与品

井筒

装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
 フリーダイヤル 0120-075-980
 福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
 フリーダイヤル 0120-055-092
 授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技

総合建築業 **株式会社 弘江組**

〒811-3406 福岡県宗像市福元4丁目20 電話(0940)32-2567

二月三日 節分祭斎行

二月三日は朝から曇天で時折雪が舞い肌寒い天候であったが、定刻の午前十一時、災難消除を願う節分祭が古式に則り本殿で斎行された。

責任役員、氏子会、海洋神



事奉賛会、消防団など豆打式奉仕者、氏子会評議員の方々、宗像市内の保育園・幼稚園の園児が参列する中、高向宮司が無病息災・延命招福の祝詞を奏上。続いて拝殿上左右二手に分かれた神職により追儼の神事「鳴弦の儀」が執り行われた。二人の神職が桃弓・葦矢を携えて、

一人は天空に向け、もう一人は地上に向けて矢を三度射る所作を行い、次に弦を三度打ち天地の邪気を祓い清めた。その後宮司、氏子会、置鮎会長が各々玉串を捧げ今年一年の厄除開運を祈念した。

日にもかかわらず詰め掛けた大勢の参拝者が待ち受ける中、葦津禰直による「鬼は外、福は内」の発声と共に福豆がまかれると、本殿周辺は瞬く間に熱気に包まれ、各々福運を手にした。

福豆を拾われた参拝者は、齋館前のテントで当たり券を品物に交換し満足そうな様子であった。

節分とは元々四季を分かつ意であるが、いつの頃からか立春の前日を重視して、他を言わず節分祭も主に立春の前日に行われ疫病を鎮める祭儀である。それとは別に大陸から追儼(ついな・おにやらい)という鬼霊を駆逐する為の行事が伝わる。我が国では、この二つが後世混濁して同一の行事となったものである。

また鳴弦の儀で用いられる桃弓は、元々桃の木で作られた弓、葦の矢は、難波(今の大阪)の葦で作られた。桃の弓は、古く「桃弧棘矢(とうこきよくし)

を以て、其の凶災を除く」とされ、わが国の神話でも伊邪那岐神が桃の実を投げ悪鬼を祓われた故事がある。葦の矢は、



極めて清く、かつ素朴なるが故に古来これを用いたと考えられる。

「豆打ち」は、室町時代以後に現れた行事で、「嬉遊笑覧」に「寶倉に年男におほせて、大豆やかにはやさせ、鬼は外福は内へと打ちはらひ云々」とあり、豆を投げ打ち悪鬼を追い払う行事である。

今年の節分祭は大社と宗像歴史観光ボランティアの会で袋詰めを行った凡そ三万袋の福豆が撒かれた。福豆のなかには、北九州市の航空会社「ス



「鳴弦の儀」





「ターフライヤー」から協賛頂いた東京〜北九州間の往復航空券や、大島産のアラ、宗像の野菜、海産物などの特産品や、道の駅むなかたのお買物券に加え、当大社からは「節分厄除みくじ」の一回無料券を協賛し福豆に付けられた。

本年も宗像観光協会が中心となり、宗像大社氏子青年会、宗像歴史観光ボランティアの会などの諸団体に助成いただいたほか、道の駅むなかた、スターフライヤーにも特別協賛を賜った。御奉仕いただきました各団体各位には衷心より御礼申し上げます。



建国祭斎行

自国の歴史を見つめ直す

二月十一日午前十一時、本殿で我國の誕生を祝う建国祭が斎行された。

当日は春先を思わせる日差しになり、定刻には多くの参拝者が見守る中、高向宮司以下神職・巫女、参列者が参進、所定の座に着座し祭典が始まった。

初代・神武天皇が、大和橿原の地で御即位された日を、我國建国の日としている。その日は、「日本書紀」では辛酉の年春一月一日としているが太陽暦採用に伴い現在の二月十一日に定められた。戦前は、「紀元節」と呼ばれていたが、敗戦に伴い廃止され、昭和四十一年に「建国記念の日」として甦った。

世界でも多くの国々でも同様に

建国の日が制定されているが、このような諸外国と比べ日本人の「建国」に対する認識・関心は低いのではないかと。先の敗戦によって伝統的な精神・価値観、歴史が否定され、それらの継承が途切れた事に要因であると考えられるが、日本人は、一度建国以来先人達が積み上げてきた国柄・歴史・文化について見直すべきである。

世界に誇れる国であると確信出来ると共に、混迷する現代日本の今後の指針になると思う。



平成二十四年 海洋神事奉賛会 初会合



一月二十八日、宗像大社海洋神事奉賛会の初会合が権田仁八郎会長、沖・中両宮奉賛会 沖西敏明副会長ほか各漁協からの代表七名出席のもと齋館にて開催された。
午前十一時より本殿に於いて大漁祈願祭を斎行、終了後会議へ入り「若布献上」「秋季大祭みあれ祭」について審議された。

宮中への若布献上は、例年宮司と随行神職、各漁協より推薦された二名の計四名で参内しているが、昨年は東日本大震災の発生により、漁協からの随行者は自粛する運びとなった。その為、会議では昨年参内予定であった宗像漁協本所(神湊)、同地ノ島支所の代表が今年改めて随行者となる事が確認された。

また、関係者より現時点での若布の生育状況が報告され、順調であることから献上日を三月二十日前後で調整する事が決定した。

次に「みあれ祭」について審議され、昨年約三十年振りに行われた陸上神幸に関しては、大きな問題も起こらず、本年も行う事が決定。

海上神幸(みあれ祭)は、今年神湊港に新フェリーターミナルが完成するのに伴い、御座船の着岸場所等が変更になる可能性もある為、事前の打合せを例年よりも早く行なうこととし初会合は終了した。

出光興産(株)社員研修



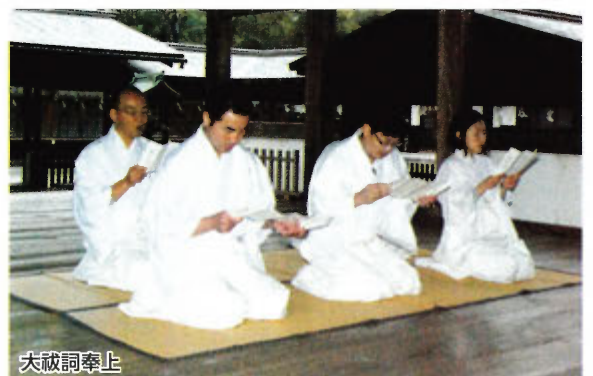
二月二十日、出光興産の社員研修が一泊二日の行程で、男性二名(内、中国の方一名)、女性二名、引率者一名の計五名で行われた。
今回の研修の主な目的は、

中国現地法人の経営層として今後活躍が期待される国嘉氏に、出光興産創業者・出光佐三氏が経営の原点として多大な影響を受けた日本文化に触れることで、その思いを継承してもらおう事であった。

研修では白衣・白袴を着装し、祭式作法(玉串拝礼等)や神道に関する講義が行われ、研修生は真剣な眼差しで受講していた。

夜には高宮祭場で鎮魂を行い、一同慣れない正座で一時の間、日頃の喧騒を忘れ精神を集中していた。国氏に、感想を聞くと「産まれて初めて正座をした」との事、文化の違いを感じた。

翌朝は境内清掃後、研修終了報告祭に参列、大社を後にした。



夫誠詞奉上

◆研修生の感想

国 嘉(くに・じあ)

「出光潤滑油(中国)

有限公司 天津工場長」

「以前京都旅行をした際、文化が保存されている事に感動した。今般宗像様で日本では精神的な文化も保存されていることを知り更に感動した。」

山本 まゆみ

「人事部教育課」

「鎮魂、日供祭等、厳粛な神事を体験させて頂きました。今後も神様への尊敬、そして感謝の念を忘れる事無く過ごして参りたいとおもいます。」

神湊港に拠点を集約 V字航路へ 宗像市営渡船再編

従来、宗像市営渡船は鐘崎〜地島間、神湊〜大島間の二航路で運営されていたが去る二月一日より鐘崎〜地島間を廃止し、地島行きは渡船は神湊港に集約されることになった。

航路見直しの背景には、宗像市職員で構成される「人づくりでまちづくり研究所」から

「離島航路の活性化や安定化を目的として離島航路の見直し」の提案があり、宗像市は、「離島地域再生計画」に基づき、離島住民の利便性の向上、地島へのフェリー就航を視野に航路の見直しを図られることになった。これらは市の付属機関である「宗像市渡船事業運営審議会」にて検

討され、市はこの答申を受け神湊港と大島、地島それぞれをV字型の航路で結ぶことに決定した。大島へはこれまでフェリーが就航していたが、この度地島にもフェリーが就航(第二・四水曜日の一便のみ)することになった。地島へのフェリー就航により車輛運搬も従来に比べ容易に

なり、島民の利便性は格段に高まるものと思われる。

ここで二島の紹介を簡単に。大島は、当大社中津宮が鎮座する周囲十五キロの島で人口は約八百人。筑前海域でも有数の漁場となっており、漁業が島の基幹産業である。近年は恵まれた自然環境を生かしたレジャースポットとしても注目され、昨年四月には釣り堀やシーカヤック・磯を体験出来る施設「うみんぐ大島」がオープンし多くの人々が島を訪れている。

地島は周囲九・三キロで人口約二百人、若布やウニ・アワビなどの磯漁業が盛んであり、又島内には約六千本のやぶ椿が自生し、地島の隠れた名産ともなっている。尚当大社が例年行っている宮中への若布献上に使われる若布は地島近海で採取されている。

今回の再編により大島・地島航路の拠点となった神湊港には、渡船運営をより効率的

に行う為、新しいターミナルが建設される。現在宗像市は宗像独自の歴史・文化を基盤とした観光事業に力をいれており、新ターミナルは別図のよう

に神社仏閣・歴史をイメージ出来る意匠となっている。運営開始は十月一日、当大社秋季大祭の幕開けを飾る「みあれ祭」の当日である。



航路図



古写真探訪 辺津宮本殿・拝殿

NO.6

今回の古写真は、撮影年が不詳であるが、大体の見当はつく。写真①の左中程に支柱によって支えられ板で覆われている部分があるが、現在の神門を建設中であると思われる。現在の神門は大正十五年

(一九二六)に完成しているので写真①は大正末期に撮影されたものと考えられる。
②の写真も同時期と思われる。現在のように拝殿周りに幄舎あくしよは無く、すっきりとした印象である。そ

の後、降雨等の際の祭典参列者や参拝者の便宜を図る為、昭和二十九年には拝殿前に外拝殿、その後「昭和の大造営」の折、拝殿を囲むように幄舎が設置された。
外拝殿・幄舎を設けないのも簡素で親近感が沸く一方、降雨時などの祭典奉仕、参拝の便宜を図る上でも重要であり、今後の検討課題である。
写真①奥の平屋の建物が当時の社務所、その横にある白壁の建物が宝庫である。



現在

外拝殿

春まつりの御案内

春季大祭を下記行事日程で斎行致しますので、皆様方お誘いの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。



主基地方風俗舞



浦安舞

- ◆3月31日(土) 午後5時 総社地主祭
- 午後6時 宵宮祭
- ◆4月1日(日) 午前11時 一日祭
- (氏子奉幣・主基地方風俗舞・浦安舞)
- ◆4月2日(月) 午前11時 二日祭(海洋神事事業功労者表彰)
- 午前11時40分 宗像護国神社春季大祭
- 高宮祭
- 第二宮・第三宮祭
- 交通安全講社祭
- 午後2時 献茶祭(南坊流)

(続)

浜の寄物

264

いしいただし



昨年、古賀市民より資料館に、装飾品や書籍類の寄贈を受け、その中に興味深いものがあり紹介したい。

酒杯は松の瘤を加工し、杯として内部に漆を塗り、その上に金粉が塗布してある。旅行などで水や酒をついだ



酒杯



右より鹿角・中、鯨歯・左、犀角

平戸藩の藩札三枚。「銭百文、平戸會所」が二枚「明治元年辰十月穀旦、表に銭百文 平戸産物方」が一枚ある。同じ犀の角、紙切れにサイカクとあつたが、犀の角かは分らない。長さ18cm、やや平べったく、厚いところは1cmほどある。一部に削ったような跡があるが形を整えられていない。薄い茶色をしている。これが犀角であれば珍しい。犀はウマ目サイ科で、インドサイ、ジャワサイ、スマトラサイ、クロサイ、シロサイの五種。南から東南アジアとアフリカの草原・湿



犀角

地に住んでいる。皮膚は角質化して固く、特に前頭部の正面中央には角質化した二、二本の角がある。これを犀角という。漢方では解熱、解毒、止血等に効果がある。もたらされた。犀は近代になってからである。しかし奈良時代の官人達が帯につけていたし、正倉院御物にも残っている。平成四年の第四十四回正倉院展(曝涼)では斑犀(斑犀、偃鼠皮御帯残欠)は革帯の飾りで偃鼠はモグラで、皮そのものはほとんど失われ、斑犀(黒まだらのサイの角)製の飾りが残っている。飾りは巡方四枚と丸鞘六枚がある。南倉の犀角如意は背中など手にとどこかぬ痒いところを意のままに搔く道具で杖ともいう孫の手である。これの頭部に褐色の犀角が使われている。正倉院宝庫には、犀角の他に玳瑁(べっこう)、鯨鬚など九柄の如意(意のままになる)が伝わっている。

ものであろう。それにモダマ(藻玉熱帯・亜熱帯のマメ科)263号でも説明)を根付にしている。モダマは長さ6cm、巾4.5cmと大きい。携帯用秤。秤の箱に「拾六匁」と墨書きがある。旅行などに携帯したものである。

ものは国史大辞典にある。明治元年は一八六八年である。平戸藩は松浦氏が治めた六万千七百石の外様大名、現在の長崎県平戸市。鹿の角は長さ9cm、中央部に穿孔されており根付と思われる。歯鯨のマッコウクジラの歯で、長さ9cm、中央部に穿孔されている。これも根付である。



日本に生きた犀が来たのは大正十年であった。象をはじめとする南方系の動物は、室町時代から、戦国、江戸時代頃には、南蛮やオランダなどを通じ

第六〇七回

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メット



北九州市 八幡西区 豊田 光子
戦争の疼きは遠し島の海昇華して咲くブーゲンビリア
戦地だった南の島に旅した作者。海と花の美しさに戦後
の時間の長さを実感したのだ。四句は何が昇華したの
かが読者にも解るように。

福津市 若木台 山崎 公俊
高宮ゆ飛び立ちしもの翼龍に手を振らむとし夢の醒めたり
シュールな夢を見た作者。奇想とも見えるが宗像大社
の高宮ならばありそうな気もして、面白い歌になった。

うきは市 浮羽町 向 則正
今日もまたわづかな不安抱へつつ明日を信じて生き継ぎてゐる
人はみな不安や問題をなにかしら抱えているものだ。
それでも明日を信じ一日一日を生き継ぐ作者。作者の
前向きな姿勢を応援したい。

宗像市 土六 山本 静子
さみどりのキャベツを入れし朝がゆに地島わかめのみそ汁うまし
健康を支えるのは食事。朝食をおいしく食べられる自分
を嬉しく思う作者の気持がよく分かる、爽やかな歌。

福津市 中央 池浦千鶴子
大振りのショルダーバック片付けむ似合わぬわれと知りたる今は
作者の胸には大きなショルダーバッグを下げ颯爽と歩
いていた若い自分があるのだろう。気がつけば似合わ
なくなつた寂しさが出ている。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦
泉よりなほ青き色たたへたる燃料棒の沈む原子炉
原発と言えば福島の事故が先ず連想されるが、原発の
内部は意外にも美しい色だった。静かだが、放射性物質
とその美が作る印象的な一首。

北九州市 戸畑区 田中ハツセ
訪ね来し娘と語り合ふしばしの間年賀の人々短歌の話
年賀に来た娘との楽しい語らい。二・三句は言葉を入れ
替えへ娘としばし語り合ふと順当にしては。

宗像市 池田 森 龍子
東し方の苦難は何ぞ震災の津波の映像に覆えさるる
自分では苦難の多い来し方と想っていたが、東日本震災
と津波を見て以来考えが変わってしまった、という歌。
三句は(震災と)に。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子
流行は関係無いのよ亡き母のセーターを着て行く新年会
母の愛用のセーターを着て行けばどこでも母を感
じられるのだろう。そんな自分に照れる作者の心情が
二句までの口語にうかがわれる。

宗像市 日の里 大和美由紀
暖かき松の内なる青空に二つの風の高く泳げり
暖かい、青空、高くと晴れやかなイメージの言葉を並べ、
松の内のめでたさが凧で上手く表現された一首。

宗像市 田久 巻 桔梗
先輩を越しくたりも友送り妣までは二十五年しかない
人生の残り時間に思いをはせる作者。もう亡くなった
先輩や友人よりも長く生きていくという心細さ。四句
は妣の享年が必要だろう。

福津市 若木台 野間 精一
権太坂函嶺(たけのね)随道宮の下箱根駅伝の地名は親し
正月二日三日の恒例行事となつた箱根駅伝の中継放送
を毎年見ている作者か。地名の並べ方にリズム感があ
り快い。地名の間には読点を。

北風に花卉ふるはずパンジーに巻きてやりたし小さきマフラー
アイリスを花卉しほるる花としてゴッホは描きき心病む日に

第五八一回

俳句作品集

宗像市 日の里 花田いつ枝
正月の顔して犬の泊りけり

編集後記

今回は私事でご勘弁下さい▼双子を授かつて早五ヶ月となりました。首も据わり、表情も豊かになり私の問い掛けにも応じてくれます。日々成長の跡が見られ、帰宅後の妻からの報告を楽しみにしています▼育児の方は、自分なりに手伝っているつもりですが、右往左往してしまい逆に家事をしている妻の手を借りてしまうなど果たして役に立っているのかどうか…。近頃、妻を見ていると良い意味で女性の子供を産むと強くなるものだと思います▼結婚する前、ある人から夫婦生活の秘訣は「尻に敷かれる」事だと言われ、「そんな馬鹿な」と思った事もありましたが、このまま行くと知らず知らずの内に尻に敷かれていくのかもしれない▼ただ「山の神」にはならないようお願いいたします。(松)

発行所 宗像大社社務所・宗像会

住所 〒八一一一三五〇五 福岡県宗像市田島二二三一
電話 (〇九四〇)六二一一三二(代)
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延・松林拓
制作・印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共 1,000円